

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：62608

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370225

研究課題名(和文) 中・近世日本における中国明代日用類書の変成 異類・異界表現を中心に

研究課題名(英文) Acceptance and Transformation of Ming Dynasty Daily Use Encyclopedias in Medieval and Early Modern Japan

研究代表者

齋藤 真麻理 (SAITO, Maori)

国文学研究資料館・研究部・教授

研究者番号：50280532

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：中・近世に量産された奈良絵本や絵巻の研究をめぐっては、従来は版本文化との関連性は等閑視されがちであった。本研究ではその版本文化を主軸として、室町物語等の作品生成の基盤や動態を検証した。その結果、中国明代に大量に出版された日用類書が奈良絵本の表現に影響を及ぼしていたことが明らかとなった。

また、明代の類書に見られる故事人物画の表象は、ギメ美術館(フランス共和国)等に所蔵される狩野派の戯画にも多大な影響を与えていたことが判明した。

以上の調査研究を通じて、中・近世日本における学芸史の特質の一端が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In general research on Nara ehon and scrolls which were mass produced in medieval and early modern Japan, the printed book culture have tended to be disregarded. In this research, I focused on the relations between the printed books culture and the expressions of Nara ehon, clarified the foundation and dynamism of the creation of Muromachi Monogatari, especially verified the influence of the daily use encyclopedias published in mass quantities in Ming dynasty of China.

In addition, this research revealed that the caricatures of the Kano school, one of which is held in the Guimet Museum(Paris), were also made with reference to the representations of historical personages in the Ming dynasty printed books.

According to the research and study above, some of the important features of literary and cultural arts in medieval and early modern Japan has been discovered.

研究分野：日本中世文学

キーワード：説話 絵巻 奈良絵本 室町物語 類書

1. 研究開始当初の背景

中・近世日本の文芸は、文字と絵画の交錯により成立し、享受された点に大きな特色がある。室町物語のほか、さまざまな物語や、『徒然草』『平家物語』『百人一首』等の文学作品はいうまでもなく、『百寮訓要抄』のような有職故実の書までもが美しい挿絵入りの奈良絵本に仕立てられ、享受されてきた。奈良絵本は何らかの祝言性を帯びていたとも考えられよう。

室町物語とは14世紀から17世紀にかけて作られた短編物語の総称であり、現在、400タイトルを超える作品が知られている。その多くは美しい挿絵を伴った奈良絵本や絵巻のかたちで伝存するが、作者や絵師、詳しい制作年代は不明の作品も多い。

これらは画証として歴史学などの分野でも注目されてきたが、従来は写本間の比較研究等々、写本文化に着目した研究が主流であった。

しかし、室町物語等の絵入り本は版本文化からも多様な影響を受けた痕跡を有している。奈良絵本が全盛期を迎えた江戸時代前期は版本文化の隆盛期でもあり、主要な古典文学作品の出版が相次いだ。

加えて、室町時代末期より、中国明代の日用類書など、明代の版本が大量に流入しており、中・近世日本の学芸や絵入り写本の生成に大きな影響を及ぼしていることは確実である。しかし、とりわけ明代の日用類書は版種の多様さと相俟って、実態は十分に把握されておらず、まして絵入り写本との関連性についての研究は殆ど行われていない。

本研究はこのような研究の現状に鑑み、絵入り写本生成の基盤や動態の解明について、日本のみならず、明代の版本文化をも視野に入れた視点から検証することを企図したものである。

2. 研究の目的

本研究では、奈良絵本が量産された江戸時代前期に焦点を絞る。

室町時代末期から舶載された中国明代の類書と、室町物語を中心とした奈良絵本・絵巻、また、同時代に複数例の作例を数える狩野派の戯画などとの関連性について調査研究を行うこととした。

このように、従来の写本文化に基づく研究成果の上に、版本文化を起点とした成果を蓄積することで、中・近世日本の学芸の特質の考究へと繋げたい。

3. 研究の方法

明代日用類書はほぼ全20巻におよぶ大部な典籍である。巻ごとに内題や柱題も変わるなど、書誌調査には細心の注意を要する。諸本系統についても極めて複雑な様相を呈し

ている。

そこで、まずは影印などの形態で公刊されている日用類書の諸本データを整理した上で、陽明文庫や谷村文庫等に所蔵される原本の調査を行うこととした。諸本により種類や掲出順も異なる数多の異類・異形などについて、データベースを構築した。

その一方、現在、福岡市美術館に所蔵される『異代同戯図巻』をはじめ、國學院大學、あるいはギメ美術館(フランス共和国・パリ)等に所蔵されている同趣の狩野派の戯画について、諸本探索と調査を行った。

その上で、これらの作品群についても多くの故事人物や異類が描かれていることから、それらをデータベース形式で整理した。なお、データベースはFile Makerを用い、画像と文字情報からなる研究素材を整備した。

以上のデータを研究の基礎資料とし、室町物語絵巻の表象とも比較検証を行って、絵入り写本の生成と展開の具体相を考究することとした。

4. 研究成果

主著として、『異類の歌合 室町の機智と学芸』(吉川弘文館、2014)を公刊した。

室町時代から江戸時代初期にかけて、室町物語をはじめとする文芸の世界では、動植物や器物など、数多くの異類たちが活躍する作品が誕生した。

周知のとおり、このような説話は世界各国、とくに古代において多く存在している。しかし、日本では、室町期に突如、異類が登場する室町物語が陸続と成立したのであり、異類物と総称されるほどの一ジャンルを形成しているのである。

従来、これら一連の作品群の誕生については、アニミズムや民間伝承等との関連性に比重をおいて説明がなされてきた。しかし、そのような観点では、室町期に限ってこれほど多くの異類物が成立した現象を解釈することはできない。

本研究の遂行により、これら異類物の生成には、和歌文学における題詠の流行と、『夫木和歌抄』をはじめとする類題集の成立とが、極めて大きな影響を及ぼしていたことが判明した。物語の結構や挿絵の構成等についても、中世に編纂された類題集や、中国の類書に収載される言説が素材を提供した例が散見する。

本書では以上のような視点から、室町物語の異類物の優品、『十二類絵巻』『鼠の草子』『ふくろふ』などを研究材料とし、文学のみならず、美術史や歴史学の研究成果にも目配りしながら、室町文芸の生成の土壌に類書的な知の集積体が重要な位置を占めていたことを指摘し、あわせて、室町文化の意義につ

いて考察を行った。

さらに、異類・異界の表象を検証する過程において、中国明代の「鶉図」に祝言性の隠喩が含まれていることを発見し、室町物語『ふくろふ』や名古屋市博物館蔵「秋草鶉図屏風」(重要文化財)の作品解釈と関わらせつつ、研究成果を公開した(「国文研ニュース」37、2014)。こうした成果は、今後、画題生成の研究テーマとも結びつくものと考えている。

また、明代類書の調査研究を進めるなかで、とりわけ、狩野派の戯画の生成基盤に明代版本の存在が大きな影響を及ぼしていることも明らかとなってきた。その研究成果の一端は、「楽土を描く 『異代同戯図巻』とその周辺」と題して、東アジア恠異学会第102回定例研究会(2015年11月28日、於名古屋大学)において発表した。

類書的な知のありかたとしては、往来物もその一つに数えることができよう。

とくに、軍記に類出する書状は往来物の重要な一要素であった。これを積極的に活用した室町物語には、たとえば『鴉鷺合戦物語』をあげることができる。ここに見える漢語表現や物語構築の論理について、類書等の記事との比較検証を行い、本作品の特質を考究したのが論文「黒白争闘 『鴉鷺合戦物語』攷」(『いくさと物語の中世』汲古書院、2015年)である。明代日用類書にも書状の文例集が収載されていることから、この問題は継続して考察を深めていきたいと考えている。

また、古道具の妖怪たちが主人公の『付喪神絵巻』は、異類異形の室町物語の代表作とあってよい。作者は不明であるが、従来の研究では『百鬼夜行絵巻』や、祇園祭など京都の祭礼との関連性が論じられてきた。詞書に『弘法大師行状絵巻』が引用されていることから、空海や真言宗と関係が深いと推測されるのであるが、それのみならず、この室町物語は、当時の画題や、都市空間における境界性を考える上でも重要な作品であることが分かってきた。

最古のテキストは室町時代に制作された絵巻であり、京都東寺(真言宗)の旧蔵品であった。それ以外はほぼ江戸時代の模写絵巻であり、崇福寺本とは挿絵や本文がかなり異なっている。

江戸時代の伝本間では、挿絵にもさほど異同は見られず、室町物語『十二類絵巻』や『酒呑童子』の構図が転用され、あるいは歌仙絵や西行法師の典型的な肖像が用いられている。

文中に挿入された妖物たちの詩歌などから考えても、『付喪神絵巻』の作者が当時の知識階級に属する人物であったことは間違いない。それらの詩歌には、漢籍や明代版本

に収載された玄宗皇帝と楊貴妃の故事など、漢籍由来の故事人物の表象が盛り込まれている。それらの故事は江戸時代前期の狩野派の画論にも画題として掲出されており、ここにもやはり明代版本類から積極的に情報を入力し、物語生成に活用しようとした痕跡が濃厚に認められる。

以上の研究成果は、「妖怪たちの秘密基地 付喪神の絵巻から」と題して、人間文化研究機構の第28回人文機構シンポジウム「妖怪空間 出そうな場所」において研究報告を行った(2016年9月)。

本研究の主目的は、異類・異界の表象を探究することにあつたが、その研究過程で室町物語に描かれる女性の教養のありようも視野に入って来ることとなった。即ち、室町から江戸初期にかけて、女性に求められた必須の教養には、画技も重要な能力のひとつに数えられていたのであり、これは今後の画題研究などにも発展し得る注目点であると思われる。従って、その研究成果と研究展望について、西尾市岩瀬文庫「岩瀬文庫講座」において基調講演を行い、後日、その内容を「姫君の育て方 御伽草子点景」(『越境する絵ものがたり』、査読無、2016、1-6)と題して論文を公刊した。

以上、本研究では、室町物語をはじめとする奈良絵本の異類・異界表現や、江戸時代前期に集中して制作された狩野派の戯画・故事人物画『異代同戯図巻』等々の表象について、類書を中心とする明代版本の積極的な摂取の痕跡を解明し、あわせて、中・近世日本の学芸の構築史において、これらの明代類書や版本に代表される新たな知の集積体が大きな役割を果たした点を指摘したものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

(1) 齋藤真麻理、姫君の育て方 御伽草子点景、『越境する絵ものがたり』、査読無、2016、1-6

(2) 齋藤真麻理、室町の学芸と絵画 鶉の九助のこと、『国文研ニュース』、査読無、37号、2014、2-3

[学会発表](計1件)

(1) 齋藤真麻理、楽土を描く 『異代同戯図巻』とその周辺、東アジア恠異学会第102回定例研究会、2015年11月28日、於名古屋大学

[図書](計3件)

(1) 今西祐一郎ほか、齋藤真麻理、三弥井書店、『岩崎文庫貴重書書誌解題 東洋文庫絵本コレクション』、2016、473

(2) 日下力、鈴木彰、三澤裕子編(小助川元太、佐伯真一、齋藤真麻理、櫻井陽子ほか)、汲古書院、『いくさと物語の中世』、2015、640(分担執筆 331-354)

(3) 齋藤真麻理、吉川弘文館、『異類の歌合 室町の機智と学芸』、2014、272

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤真麻理 (SAITO, Maori)

国文学研究資料館・研究部・教授

研究者番号：50280532

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()